

書籍のスムーズな発行のために！ 予約注文をお願いします！

河川工学者三代は 川をどう見てきたのか(仮題)

安藝皎一、高橋裕、大熊孝と近代河川行政一五〇年

著者：篠原 修 発行：農文協プロダクション

発行予定：2018年2月末 四六判・並製・400頁 予定価格：3000円

(予約注文の場合、税なし、送料無料)

□本書の内容

本書には二つの主題(テーマ)がある。一つは、安藝皎一(1902~1985)、高橋裕(1927~)、大熊孝(1942~)とつながる河川工学者三代のユニークな生き方と学の歩みを評伝のかたちで描くこと。もう一つは、この三人の行動と発言を手がかりにしながら、近代河川行政 150 年と、それに関わった河川技術者・工学者が川をどのように捉えてきたかを描くことである。

大熊は高橋のもとで、そして高橋は安藝のもとで河川について学んだ。技術官僚から政策官僚となった安藝皎一、歴史家、論説家にして土木のスポークスマンの高橋裕、そして市民の河川工学者、大熊孝とそれぞれ立ち位置は異なるが、河川改修史に重点を置いた歴史的現場的な視点をもちつづけ、明治以降の近代河川行政に批判的な立場をとりつづけた点では共通する。河川工学者三代とよぶ所以もそこにある。

希代の三人の河川工学者を通じて、近代河川行政の目標と到達点、そして環境や景観、脱ダムや河川整備計画への住民参加など、今後の課題を明瞭かつリアルに描く本書は、技術者、研究者、行政関係者はもちろんのこと、河川に関心をもつすべての人にとって必読の書である。

□著者紹介



篠原修：1945年生まれ。東京大学工学部土木工学科卒。東京大学および政策研究大学院大学名誉教授。工学博士。GS(グラウンドスケープ)デザイン会議代表。著書『土木造形家百年の仕事』(土木学会出版文化賞受賞)『土木デザイン論』(土木学会出版文化賞受賞)『都市の水辺をデザインする』(編共著)ほか多数。

□本書の主人公

安藝皎一：1902年生まれ、1985年没。内務省、東京帝国大学教授（兼任）。資源調査会初代事務局長、関東学院大学工学部教授、日本河川開発調査会会長等を歴任。著書『河相論』『河川工学』『日本の資源問題』『水害の日本』『日本思想体系 62 近世科学思想 上』（校注・解説）ほか多数。

高橋裕：1927年生まれ。東京大学第二工学部土木工学科卒。日仏工業技術会会長、東京大学名誉教授。著書『国土の変貌と水害』『都市と水』『地球の水が危ない』『川と国土の危機』『現代日本土木史』『川から見た国土論』『河川工学』ほか多数。

大熊孝：1942年生まれ。東京大学工学部土木工学科卒。新潟大学名誉教授。工学博士。NPO法人「新潟水辺の会」顧問。新潟市潟環境研究所所長。著書『利根川治水の変遷と水害』『洪水と治水の河川史』『川がつくった川、人がつくった川』『技術にも自治がある』ほか多数。



大河津分水補修工事竣工記念碑の前で
高橋裕氏と大熊孝氏

□「はじめに」より

……大熊は専門外の間人は知らないであろうが、河川の分野では知られている人物である。特に脱ダム派の学者として。ただし有名になったから書こうとするわけではない。DR論文以来一貫して建設省、国交省の河川行政を治水計画の観点から批判し、とりわけて優れているのは、地道な現場調査と考察に基づいて「大熊河川工学」を築き上げたことである。更に言えば、時の権力や権威におもねる事なく「拙」を貫いてきた姿勢に共感を覚えるからである。「拙」という生き方は筆者が最も尊敬する夏目漱石が最も重視していた姿勢であった。

……大熊に聞き、資料を調べると、大熊のような人物が俄かに出てきたわけではない事に気づかされる。大熊の先生である高橋裕も建設省の河川行政に批判的な学者で、大熊は高橋の講義に触発されて河川の途を選んだのだ。高橋無くして今の大熊は無いのである。その高橋に聞くと安藝皎一先生が居なければ、河川をやっていなかったと言うのである。やはり高橋も安藝に惹かれて河川の途を歩み始めたのであった。かくして大熊を描こうと考えた評伝は、必然的に安藝、高橋、大熊の河川工学者三代の評伝となった。

……どうせ書くなら安藝が、高橋が、大熊が批判の対象とした明治以降の近代河川行政とはいかなるものだったのか、それを知りたくなる。必ずしも安藝以下の批判が常に的を得ているかどうかは分からないが、それも筆者なりに判断してみたい。「やめたほうが」という声が目元を刺した。一応土木工学科で学んだとは言え、河川については素人なのだから。

……でもやってみようか、という気持ちになったのは土木技術者の評伝を書いている作家が、おしなべて文系の出身で土木の理論や技術に疎く、肝心だと思われる点に突っこみが不足していると不満を感じていたからかもしれない。筆者は丁度、碁や将棋で言う「岡目八目」の位置にいる。全くの素人でもなく、プロの当事者でもない方が戦局がよく見えるという事もあり得る。こういう具合に自分を納得させて、無謀な執筆に取り掛かったのであった。

目次

はじめに

序章 川との付き合い方、議論のポイント

1章 内務省土木局の河川行政

2章 安藝皎一

父・杏一／新潟高校への進学、東大英文科から土木工学科への転身／鬼怒川改修事務所での青山士との出会い／富士川改修事務所での経験、「河相論」の発表／青山士と宮本武之輔という二人の先輩

3章 TVA と河水統制事業、宮本武之輔

専用ダムの時代／河水統制事業による多目的ダム開発／戦時色の強まりと宮本武之輔の登用

4章 戦後大水害の時代(昭和20～34年)

室戸台風、キャサリン台風／資源調査会の発足／確率論的基本高水目標への変更

5章 高橋裕

静岡生まれの静岡育ち／第二工学部への進学、安藝との出会い／大学院、筑後川調査を経て専任講師に／川を見続けたフランス留学

6章 水害論争

安藝の下に集まった強者達／大蔵省主計官の治水計画論

7章 教授、高橋裕

助教授、河川研の行方／教授昇進

8章 高度成長時代の河川行政（Ⅰ）

「河川砂防技術基準」にみる戦後河川行政の思想／河川計画の目標と基準

9章 大熊孝

付き合いの始まり／台湾からの引き揚げ／千葉での生活／東大入学／応力研から河川研へ、学生結婚／DR論文、就職

10章 大熊孝と宮村忠、虫明功臣

三人の出会い、「隔離病棟」／虫明功臣／宮村忠／三人組の高橋、安藝評／広瀬典昭の人物評

11章 高度成長時代の河川行政（Ⅱ）

ダム反対運動／水害裁判（筑後川水害・加治川水害・大東水害・多摩川水害・長良川安八水害）／総合治水／日本河川開発調査会

12章 大熊孝、長岡へ

信濃川が暮らしの一部に／新潟大学で始まった研究者生活／『利根川治水の変遷と水害』——大熊・河川工学の出発点／『洪水と治水の河川史』——水害の受容宣言／『川がつくった川、人がつくった川』——大熊・河川の定義の完成／哲学者、内山節との出会い

13章 高橋裕の土木学会

学会誌の編集活動／社会に開かれた学会へ

14章 市民の河川工学者・大熊孝

萬代橋、市民の愛着／映画「阿賀に生きる」の製作／「新潟水辺の会」／全国の河川問題との関わり

15章 環境・景観対応の河川行政

公害の時代／河川環境整備／バブルの時代／多自然型川作り／河川の横断工作物と環境・景観

16章 河川行政、残された課題

堰と河口堰／脱ダムと基本高水論争／スーパー堤防と超過洪水／住民参加の「河川整備計画」／総合治水／人材

□大熊孝氏からのコメント

河川行政を通史的に書いた本としては、西川喬著「治水長期計画の歴史」（財・水利科学研究所、昭和44年11月発行）ぐらいしか私は知りません。これは、昭和39年の河川法改正直後に書かれたもので、水資源の動向についてはほとんど触れていません。ましてや平成9年の河川法改正後の環境や景観を含めた、河川行政史はまだ皆無です。

篠原さんのこの本は、平成9年の河川法改正も踏まえた形で論述されており、出版されれば画期的と言えるのではないかと思います。

この本には、これまでの河川行政、河川工学に批判的な内容も書かれています。しかし、土木技術者の「心」——技術者としての良心・矜持はもちろんのこと当事者としてのつらさも含めて——とでもいうものを理解している、土木屋である篠原さんが書かれているという点でも画期的とも言えるのではないのでしょうか。

篠原さんの今回の本が出ることによって、土木屋自身、そして世の中からの土木に対する目も変わっていくのではないかと期待する次第です。

【予約申込書】 河川工学者は川をどう見てきたのか

Fax 03-3584-0485（平成30年1月末まで）

お名前	
申し込み冊数	
送付先（住所）	
電話番号	
メールアドレス	
所属	

下記アドレスかファックスにてお申し込みください。
予約申し込みの場合、税なし、送料無料とさせていただきます。

農文協プロダクション（担当：田口）

〒107-0052 東京都港区赤坂7-5-17

Fax 03-3584-0485 Tel 03-3584-0416

Mail taguchi@sinseisaku.co.jp（文字はすべて半角にしてください）